



女性医師像から見えてくる新しい医師像 (<トピックスPARTI>女医問題III)

伴, 政雄

(Citation)

神戸大学医学部神緑会学術誌, 17:62-62

(Issue Date)

2001-08

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81007696>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81007696>



女性医師像から見えてくる新しい医師像

淀川キリスト教病院 形成外科 伴 政 雄 (55年卒)

本年3月に、“神緑会学術雑誌の女医特集に是非とも形成外科の医師の立場から、意見をお願いしたい”と、編集委員の松井先生から突然の電話があった。実は、本年7月より3人目の形成外科医師として女性医師（私は女医という言葉はどことなく差別的なニュアンスがあり好きでない）を迎えることになっていた。実際どのように接するべきか若干案じていたので、この電話は、私に真剣に女性医師について考えてみるように、という天の声だと感謝しつつ、この原稿を引き受けた次第である。

4月26日に小泉内閣が誕生し、閣僚17人中5人が女性、女性閣僚の比率は29%、大阪府島本町議会では議員18人のうち8人が女性議員で、比率は44%を占め、女性の政治への進出は目覚ましいものがある。政治や議会の閉塞状態を変え、ひいては社会を変革するには女性の進出が不可欠であろう、と朝日・毎日の両新聞は論じている。医学界ではどうであろう？医学界でも女性医師は確実に増えており、現在、医学部の学生のうち約1/3は女性で、専門医制度のある学会をみても皮膚科で54.8%、眼科で38.7%、形成外科で12.2%が女性医師である。しかし、学会で理事や評議員として女性の占める割合は、皮膚科で4.5%、眼科で5.5%、形成外科では僅か1.3%。各学会での重要なポストへの女性医師の進出は、政界に比較し医学界では遅れているのは間違いないようである。男女で医師としての能力や適正に差があるためであろうか？

私は、女性と男性をひっくり返してどちらが医師として適応しているのか、または優れているのかと論じるのは困難であり、最終的には個々人の性格、能力、などによってその適応性が左右されると考える。有能な女性医師もおれば、無能で適性のない男性医師もいる、その逆もあるだろう。今まで、有能な女性医師が好むと好まざるに拘わらず、医師という職務を完全または不完全に放棄せざるを得ない事態をみてきた。その理由としては、家庭、特に子育ての問題がある。さらに、女性医師の結婚相手は、ほとんどが男性医師であり、その場合には、家事・育児の協力は得難い。得られたとしても、その比重は女性医師の方に傾く傾向にある。その結果は、女性医師のretireかパートタイ

ム勤務となりがちである。

私の病院の内科に勤務する瀧野敏子医師が、昨年度の第50回日本病院学会で“21世紀の女性医師像、わたしたちはどこへいくのか”という演題で発表をされた際に、淀川キリスト教病院とその関連施設の女性医師にアンケートを行っている。そのアンケートの集計では、仕事と家庭を両立させるために必要なこととして、女性の意識改革は21%、男性の意識改革は33%、社会システムの改革が43%で、多くの女性医師は女性自身よりも周囲の改革が必要と考えている。勿論男女双方の意識改革の必要性はあるが、社会システムの改革として、瀧野医師は産休・育児・介護休暇、保育所、病院内託児所などの育児支援システム、夫婦間のワークシェアリングなどの就労スタイルの柔軟化、医師人材バンクの利用、非常勤・パート医師としての勤務形態の保証が必要であるとしている。

最近では、男性が育児休暇をとることも稀ではあるが現実には存在する。また、子供と接する時間を大切にしたいという新しいタイプ？の男性も出現し、ITを利用した在宅起業も可能となってきた。こういうタイプの男性は、確実に医学界にも出現するだろう。将来ITを利用した在宅診療も可能になるかもしれない。そうなると、現在問題となっている女性医師をとりまく諸問題は、将来、男性医師をも巻き込んだ大きな課題となり、男女が平等に勤労するための、社会的テーマの一つとなりうるであろう。

今まで我々は、医師という職業を社会への奉仕が可能であり、経済的な優位性、社会的地位も獲得できるなどという理由で選択して来た。しかし、今後医療訴訟が増加の一途をたどり、社会も医療に対しさらなる情報公開を要求し、informed consentを徹底させないといけな時代を迎える。増加していく社会のニーズに答えながら一臨床医師として生き抜いていくには、第一に医師という職業は根本的には社会への奉仕であるということを実感に再認識しないと、女性であろうが男性であろうが医師としての職務を遂行していけないであろう。今後、有能かつ奉仕精神の旺盛な女性医師と男性医師がより平等に、快適に勤務できる社会環境の整備、意識改革が行われることを期待したい。